

杜甫における「遊び」―「狂」の用例を中心に―

山 島 めぐみ

はじめに

杜甫の作品は、「沈鬱頓挫」、「慷慨」、「悲壯」、「謹嚴」といった言葉で評されることが多い。この「沈鬱頓挫」という評語は、天寶九載（七五〇）の「鵬の賦を進むる表」⁽¹⁾『杜詩詳註』卷二十四）に由来するものである。⁽²⁾

臣之述作、雖不能鼓吹六經、先鳴教子、至於沈鬱頓挫、隨時敏捷、揚雄枚舉之徒、庶可企及也。

臣の述作は、六經を鼓吹し、教子に先鳴すること能わずと雖も、沈鬱頓挫、隨時敏捷なるに至りては、揚雄枚舉の徒も、企及すべきに庶きなり。

「沈鬱頓挫」は、「隨時敏捷」と結び付けて考えるべき言葉であり、重くふさがって停滞している気が時宜に感じずばやく動くという、作品における趣の変化を示している。つまり、杜甫は「沈鬱」から「敏捷」への変化を自身

の作品の特徴とし、自負しているのであり、決して「沈鬱頓挫」だけで評されるものとは考えていないのである。しかし、後代の評論家は杜甫の意に反して「沈鬱頓挫」の部分のみを取り上げ、さらに「慷慨」、「悲壯」、「謹嚴」といった評も加わって、その憂愁の詩風ばかりが強調されることとなった。従来、杜詩の遊興や諧謔性についての研究がほとんどなされてこなかったのは、このような評に拠る所が大きいためと考えられる。

だが、杜甫自身が「隨時敏捷」と述べるように、杜詩の中には、精神を自由に解放することの楽しみを詠った詩も数多くあり、杜詩全体を「沈鬱」の評語だけで語り尽くすことはできない。こうした精神を解放し楽しむ要素は、杜詩における「遊び」としてとらえることができるだろう。

本稿は、これまで取り上げられることの少なかった杜詩の「敏捷」の一側面として、この「遊び」の有り様を検討

し、さらに酒興にまつわる「狂」の意味を洗いなおそうとするものである。

一 杜甫の「遊び」

ロジェ・カイヨワの『遊びと人間』によれば、「遊び」とは「気晴らし、熱狂、自由な即興、気ままな発散（パイディア）」の要素を持つ行為であるという。³⁾本章では、このカイヨワの定義を用い、杜甫が日常性から解放されて楽しみ、気晴らしや発散をしている詩を取り上げ、その表現について考察してみたい。

乾元二年（七五九）作の「西枝村に草堂を置く地を尋ね夜賛公の土室に宿す二首 其一」（『杜詩詳註』巻七）は、詩題の通り、杜甫が友人である賛公と共に、秦州近郊の西枝村で草堂を設ける場所を探したことを詠じた詩である。一部を挙げる。

賛公湯休徒	賛公は湯休の徒
好静心跡素	静を好みて心跡素なり
昨枉霞上作	昨霞上の作を枉げ
盛論巖中趣	盛んに巖中の趣を論ず
怡然共携手	怡然として共に手を携え
恣意同遠歩	意を恣にして同じく遠歩す

捫蘿洗先登	蘿を捫りて先登するに洩り
陟巖眩反顧	巖に陟りて反顧するに眩す
要求陽岡煖	求めんと要す 陽岡の煖かなるを
苦陟陰嶺互	陟るに苦しむ 陰嶺の互なるを
惆悵老大藤	惆悵す 老大の藤に
沈吟屈蟠樹	沈吟す 屈蟠の樹に
卜居意未展	居を卜するの意 未だ展べず
杖策迴且暮	策を杖きて迴れば且に暮れんとす

詩中に「昨霞上の作を枉げ、盛んに巖中の趣を論ず」とあるように、この遠出を決行することになった背景には、賛公が杜甫に西枝村のすばらしさを吹聴していた経緯があった。しかし、「居を卜するの意未だ展べず」と言い、『杜臆』巻三に「深山に隣無く、猿狖を侶と為す。豈に安居することを得んや。」ともあるように、この場所はともて庵を結ぶに適するような土地ではない。⁴⁾西枝村に詳しい賛公はそのことをあらかじめ知っていたにちがいない、この遠出の真の目的は、秦州郊外の自然を満喫することにあつたと考えられる。「怡然」、「恣意」の語からは、杜甫が遠出を心のままに楽しんでいることが読み取れる。つたに、かつて先に登るのを洩ったり、振り返って高さに眩暈したりする様子は、まるで無邪気な子どものものである。其二

の詩は、

幽尋壹一路 幽尋 壹に一路ならんや

遠色有諸嶺 遠色 諸嶺有り

晨光稍朦朧 晨光 稍く朦朧たらば

更越西南頂 更に越えん 西南の頂きを

と結ばれており、杜甫がさらに奥深い峰々を求めていることが分かる。危険な状況は恐怖でもあるが、山水の楽しみを究める者にとっては、また心地よい興奮でもあるのである。さらに、大げさに「惆悵」、「沈吟」して不満を述べる杜甫は、抑圧された日常の世界から抜け出して自由である。この詩の中には、西枝村という人里離れた場所、賛公という気の置けない友人と、意のままに遊ぶ杜甫の様子が描かれている。

また、杜甫には、酔って馬に乗る遊びの楽しさを表現した詩がある。酒を飲んで馬に乗るという行為は、古くは『晋書』卷四十三「隱逸伝」の山簡の伝の中に見られるものである。⁵⁾

永嘉三年、出為征南將軍、都督荆湘交広四州諸軍事、
仮節鎮襄陽。于時四方寇乱、天下分崩、王威不振、朝
野危懼、簡優游卒歲、唯酒是耽。諸習氏、荆土豪族、
有佳園池、每簡出嬉遊、多之池上、置酒輒醉、名之曰

高陽池。時有童兒歌曰、山公出何許、往至高陽池。日
夕倒載帰、酩酊無所知。時時能騎馬、倒著白接籠。拳
鞭向葛疆、何如并州兒。疆家在并州、簡愛將也。

永嘉三年、出でて征南將軍、都督荆湘交広四州諸軍
事と為り、仮節して襄陽に鎮す。時に四方寇乱し、天
下分崩して王威振るわず、朝野危懼するも、簡優游と
して歳を卒え、唯だ酒にのみ是れ耽る。諸習氏、荆土
の豪族にして、佳き園池有れば、毎に簡出でて嬉遊し、
多く池上に之き、置酒して輒ち酔い、之に名づけて高
陽池と曰う。時に童兒有りて歌いて曰く、山公何許に
か出でん、往きて高陽池に至る。日夕倒載して帰るも、
酩酊して知る所無し。時時能く馬に騎り、白接籠を倒
著す。鞭を挙げて葛疆に向かい、并州の兒に如何、と。
疆の家并州に在り、簡の愛將なり。

各地で抗争が起こり、国家崩壊の危機にある中、山簡は
何食わぬ顔で池に遊び、酒に浸る。夜になって馬に乗り帰
ろうとするが、酩酊状態で帽子をさかさまにかぶっている
ことも分からない。この滑稽で、脱俗的な人物は、詩のモ
チーフとしても魅力的であつたらしく、李白の詩の中には
山簡を詠じた詩がいくつか見られる。例として、「襄陽曲
四首」其二(『李太白全集』卷五)を挙げよう。⁶⁾

山公酔酒時 山公 酒に酔う時
酩酊高陽下 高陽の下に酩酊す

頭上白接籬 頭上の白接籬

倒著還騎馬 倒著して還た馬に騎る

この詩には、山簡の逸話がそのまま詠み込まれている。さらに、同じく李白作の「江夏贈韋南陵氷」(『李太白全集』卷十一)には「山公酔後能く馬に騎る」の句が、「襄陽歌」(『李太白全集』卷七)にも「接籬を倒着し花下に迷う」、「靡鞍に笑坐して落梅を歌う」の句がある。このように、李白が酔って馬に乗る行為を詠じた詩は、いずれの場合も山簡の典故から抜け出すことはない。

一方、杜甫の詩の中で、酔って馬に乗る行為を描いたものに、天宝年間の作品である「飲中八仙歌」(『杜詩詳註』卷二)がある。八人の酒友が酒仙として描かれており、その最初に、酔って馬上でふらふらとし、井戸に落ちて眠る賀知章が詠われている。

知章騎馬似乗船 知章が馬に騎るは船に乗るに似た

り

眼花落井水底眠 眼花さき井に落ちて水底に眠る

「眼花」は、眩暈を起こしている様子を表現したものである。この「眼花」と似通った表現は、乾元二年(七五九)

作の「龍門閣」(『杜詩詳註』卷九)にも見受けられる。

目眩隕雜花 目眩みて雜花隕ち

頭風吹過雨 頭風 過雨を吹く

絶壁に取り付けられた頼りない棧道を仰ぎ見ての句である。種種の花々が目の前におちゆくようにくらくらとし、頭に風が吹いて雨が吹きつけるといふのは、杜甫自身の一病的な眩暈の感覚である。杜甫は、高所に臨んでの混乱状態を敏感にとらえ、そのいきいきとした実感を、典故を用いずして再現してみせているのである。「飲中八仙歌」の「眼花」もこの「龍門閣」の表現と同じであり、馬上の酔いによる眩暈を鮮やかな実感として詠じていると言える。また、大曆二年(七六七)、夔州での作「崔評事弟相迎えんことを許すも到らず、応に老夫泥雨を見て出づるを怍れ、必ず佳期を愆るを慮るなるべし、筆を走らせて戯れに簡す」(『杜詩詳註』卷十八)の詩にも、「酔於馬上」の語が見られる。

江閣邀賓許馬迎 江閣賓を邀うるに馬迎を許す

午时起坐自天明 午时起坐す 天明よりす

浮雲不負青春色 浮雲にも負かず 青春の色

細雨何孤白帝城 細雨にも何ぞ孤かん 白帝城

身過花間露濕好 身花間を過ぐ 露濕するも好し

酔於馬上往来軽 馬上に酔いては往来軽し

いとこが杜甫を西関まで迎えにきてくれると言ったはずなのに、正午になつても迎えに来なかつたため、戯れに書き送つた詩である。「身花間を過ぐ霑湿するも好し、馬上に酔いては往来軽し」の句について、『杜詩詳註』に引く朱瀚の注は、「霑湿するのがどうして好いことだろうか。酔えばぐつたりしてしまふのに、どうして体の軽いことがあるだろうか。」と述べている。通常では不快なだけの霑湿も、ほどよい酔いが心地よくし、馬上の往来も楽しいものになっているのである。この句は、杜甫が想像し、期待する内容であり、酔つて馬に乗ることを楽しいこととする杜甫の認識がうかがえる。

さらに、「酔いて馬より墜つるを為す、諸公酒を携えて相い看る」(『杜詩詳註』卷十八)の詩は、酔つて馬に乗る楽しみそのものを題材とした作品である。

甫也諸侯老賓客 甫は諸侯の老賓客

罷酒酣歌拓金戟 酒を罷めて酣歌金戟を拓る

騎馬忽憶少年時 馬に騎りて忽ち憶う 少年の時

散蹄迸落瞿唐石 蹄を散じて迸落す 瞿唐の石

二句目に「罷酒」とあるが、酒を飲み終えてもすぐ酔いが醒めるわけでない。だから、杜甫は上機嫌で「酣歌」し

ながら戟を手に馬に乗る。馬に乗ると急に若い頃を思い出し、蹄で石がころげ落ちてしまふような瞿唐峡の道を、全く危険をかえりみることなく駆けていく。

江村野堂争入眼 江村野堂 争いて眼に入る

垂鞭鞞靽凌紫陌 鞭を垂れ靽を鞞れて紫陌を凌ぐ

向来皓首驚万人 向来皓首 万人を驚かす

自倚紅顏能騎射 自ら倚る 紅顏能く騎射するに

安知決臆追風足 安んぞ知らん 臆を決す追風の足

朱汗驂驪猶噴玉 朱汗驂驪 猶お玉を噴くに

不虞一蹶終損傷 虞らず 一蹶し終に損傷するを

人生快意多所辱 人生意を快にすれば辱めらるる所多

し

杜甫は手綱をしっかりと持たず、手放しのような状態で駆けていくが、結局は疲れきつた馬がつまずいて落馬し、けがを負つてしまう。詩の後半部は、見舞いに来てくれた友人に自分の失態を呈示する目的で、いささか自嘲気味に書かれている。しかし、飲酒による高揚感と、騎乗の快樂とがこの詩全体を貫く主題であり、杜甫の体感する近景、遠景の変化やスピード感が、臨場感あふれる構成で描き込まれて、鮮やかに読者に伝わってくる。李白の詩は、「山簡伝」という逸話を典故とすることで類型化する。それに

対して杜甫の詩は、馬上の酔いの感覚が、個人的体感としてより鋭敏に表現され、獨創性が高い。特に「酔いて馬より墜つるを為す、諸公酒を携えて相い看る」の詩は、馬上での体感が極めて獨創的に表現されており、馬上の酔いの快楽を文学表現に昇華し得た初めての作品と云うことができるだろう。

これまで見てきた「遊び」の詩の中には、日常から脱し、自由に楽しむ杜甫自身の様子が描かれていた。これら「遊び」の行為における興奮や恣意性、発散性といった特徴は、杜甫の詩中で用いられる「狂」の意味にもつながるものである。次章からは「狂」と「遊び」との関連性について見ていきたい。

二 酒興と「清狂」

杜甫には「狂」の字の用例が三十以上あり、天寶四載（七四五）、三十四歳作の「李白に贈る」〔『杜詩詳註』卷一〕に始まって、大曆五年（七七〇）、杜甫五十九歳作である「風疾に舟中枕に伏し懷を書す三十六韻湖南の親友に呈し奉る」〔『杜詩詳註』卷二十三〕まで、生涯を通じて「狂」の字を用いている。その中で特に注目したいのが、上元元年（七六〇）、四十九歳作の「狂夫」〔『杜詩詳註』

卷十九）である。

欲填溝壑唯疏放

溝壑に填せんと欲するも唯だ疏放なり

自笑狂夫老更狂

自ら笑う 狂夫老いて更に狂たるを

この詩の「狂夫」という表現について、横山伊勢雄氏は、「自己を疎外する外界を睨み付けている目」に起因すると述べている⁽¹⁰⁾。また、谷口真由実氏は、この詩が「狂夫」の語を直接的自称として用いた初めての作品であることを指摘し、この表現が「自己に向けられた眼差しの鋭さ」によって生み出されたものであると言う⁽¹¹⁾。杜甫の疎外感や自身に対する冷やかな客観性が「狂夫」という表現を生んでいるとするのであるが、しかし、「遊び」という観点から改めて杜詩における「狂」の用例を見直したとき、それだけではない新たな解釈の可能性も見えてくるのではないか。本章では手始めに、「清狂」の語を用いた詩を取り上げ、その意味について検討してみたい。

大曆元年（七六六）秋、夔州での作である「壯遊」〔『杜詩詳註』卷十六〕は、杜甫の自叙伝とも言うべき内容を持つ作品であり、若かりし頃の己の行動が「清狂」という言葉で表現されている。

放蕩齊趙間

裘馬頗清狂⁽¹²⁾

春歌叢台上

冬獵青丘旁

呼鷹早樞林

逐獸雲雪岡

射飛曾縱控

引臂落鵝鶻

放蕩たり 齊趙の間

裘馬頗る清狂なり

春は叢台の上に歌い

冬は青丘の旁に獵す

鷹を呼ぶ 早樞の林

獸を逐う 雲雪の岡

飛を射て曾ち控を縱つ

臂を引きて鵝鶻を落とす

以上の句は、郷貢進士として都に上るも及第せず、長安から去った後、自由に遊びまわった頃の様子を詠った部分である。「裘馬」は、『論語』雍也篇の「肥馬に乗り、輕裘を衣る。」をもとにした語であり、軽い皮衣を着て、肥えた馬を輕快に乗りこなしていることを示す。『杜詩趙次公先後解輯校』戊帙卷十には「杜甫が裘馬に（清狂の語を）用いているのは、裘馬に意を注いでいる様子が清狂のようであることを言っているのである。」⁽¹³⁾とあり、馬ではなく杜甫自身が清狂であることと解釈している。

「清狂」の語は、杜甫以前の文学作品には、左思の「魏都賦」と李白の「侍郎叔に陪して洞庭に遊ぶ、醉後三首」其の一の詩以外にほとんど用例が見られない。「魏都賦」の例を挙げよう。

先生之言未卒、吳蜀二客、嚶焉相顧、瞰焉失所。有覲
瞽容、神志形茹。弛氣離坐、愼墨而謝曰、僕覚清狂、
怵迫闕濮。習蓼蟲之忘辛、翫進退之惟谷。非常寐而無
覚、不覲皇輿之軌躅。

先生の言未だ卒らざるに、吳蜀の二客は、嚶焉として
相い顧み、瞰焉として所を失う。覲瞽の容有りて、神
志い形茹る。氣を弛め坐を離れ、愼墨して謝して曰く、
僕が覚清狂にして、闕濮に怵迫す。蓼蟲の辛を忘れた
るに習い、進退の惟れ谷るに翫う。常に寐ねて覚むる
無きに非ざるも、皇輿の軌躅を覲ざりき。

西蜀公子の蜀都の話、東吳王孫の吳都の話を聞いていた
魏国先生が、魏都の話をして道を説き、二人を諫めた後の
部分である。この用例では、自分たちの愚かさを表す言葉
として、「清狂」の語が用いられている。「蓼蟲の辛を忘れ
たるに習い、進退の惟れ谷るに翫う。」とは、蓼食う虫が
辛いのを忘れて食べ、進退窮まっていることであり、ここ
では蓼虫が自分の食べる葉を辛いと分らないような、盲目
的な状態が「清狂」とされている。

また『漢書』卷六十三「昌邑哀王劉髆伝」にも「清狂」
の語が見える。孝宣帝は、前帝であった賀を忌み嫌い、警
戒していた。そこで、山陽郡の太守である張敞は、退位後

の賀を視察して、その生活を孝宣帝に伝えた。以下は張敞が賀の様子を述べた部分である。

故王年二十六七、為人青黑色、小目、鼻末銳卑、少須眉、身体長大、疾痿、行步不便。衣短衣大袴、冠惠文冠、佩玉環、簪篋持牘、趨謁。臣敞与坐語中庭、閱妻子奴婢。臣敞欲動觀其意、即以惡鳥感之。曰、昌邑多鳥。故王曰、然。前賀西至長安、殊無鳥。復來、東至濟陽、乃復聞鳥聲。(中略)察故王衣服言語跪起、清狂不惠。故王年二十六七、人と為り青黑色、小目、鼻末銳卑にして、須眉少なく、身体は長大、痿を疾みて、行歩便ならず。短衣大袴を衣、惠文冠を冠し、玉環を佩び、筆を簪して牘を持ち、趨りて謁す。臣敞与に坐して中庭に語り、妻子奴婢を閲す。臣敞動して其の意を觀んと欲し、即ち惡鳥を以て之之感ぜしむ。曰く、昌邑鳥多し、と。故王応えて曰く、然り。前に賀西のかた長安に至りしとき、殊に鼻無し。復た來たり、東のかた濟陽に至れば、乃ち復た鳥声を聞く、と。(中略)故王の衣服言語跪起を察するに、清狂にして惠ならず。賀は、短い上着に大きな袴をつけ、侍中の帽子をかぶり、筆をかんざしにするという異様ないでたちで現れる。張敞は、賀を挑発して不吉な惡鳥である鳥の話をしてみる

が、賀は惡意と取らずに素直に受け答えをしている。張敞は、賀のおかしな服装や、愚かで素直な話し振りを觀察し、「清狂」であつて賢くない人物と結論付けている。この「清狂」について、蘇林注には「凡そ狂とは、陰陽の脈氣く濁る。今此の人狂せざるも狂者に似る、故に清狂と言ふなり。或ひと曰く、色理清徐にして心慧からざるを清狂と曰う、と。清狂は、今の白癡のごときなり。」とある。本當の狂ではないが、狂者のように見える人のこと、知能の働きの劣つていて愚かな人のことを指すというのが蘇林の解釈である。では、李白の詩における「清狂」はどうだろうか。「侍郎叔に陪して洞庭に遊ぶ、醉後三首」其一(『李太白全集』卷二十)の詩には、酒を飲んで「清狂」となつてゐることをいう句がある。

今日竹林宴 今日 竹林の宴

我家賢侍郎 我家の賢侍郎

三杯容小阮 三杯 小阮を容れ

醉後發清狂 醉後 清狂を發す

『李太白全集』の王琦の注は、「詩人が清狂というのは、情を詩酒に縦にする類のことであつて、『漢書』の解する所とは異なつてゐる。」と述べている。『漢書』の解するところというのは、蘇林の解釈のことである。王琦の解釈に

従えば、李白の詩における「清狂」は、思うままに酒や詩作を楽しむことであり、愚かな様子を示しているわけではない。

「壯遊」の詩に戻って考えれば、「春は叢台の上に歌い冬は青丘の旁に獵す」以下の句は、「放蕩たり齊趙の間 裘馬頗る清狂なり」の具体的な内容を示しており、また「放蕩」と「清狂」とは、ほとんど同質の語として用いられていると考えられる。つまり、「壯遊」詩における「清狂」は、李白の例と同じく、春は歌い、冬は狩りをするというように、心のおもむくまま放胆に、自由に遊び楽しむことと解することができる。

「壯遊」以外に「清狂」の語を用いた詩としては、大曆二年作の「悶を遣る、戯れに路十九曹長に呈す」(『杜詩詳註』卷十八)がある。

晩節漸於詩律細 晩節 漸く詩律に於いて細やかなり
誰が家ぞ教しは去りて酒杯を寛がす

は

唯君最愛清狂客 唯だ君最も愛す 清狂の客

百遍相過意未闌 百遍相過ざるも 意未だ闌きず

この詩の中では清狂の客人が、愛すべき酒友として表現されている。気兼ねなく酒を飲み、放胆にふるまい合うこ

とのできる友人を、好意的な意味で「清狂」と表現している。

「魏都賦」や『漢書』の「清狂」は、盲目的で愚かなことを指し示しており、否定的な文脈で用いられていた。それに対して李白、杜甫の作品における「清狂」は、豪放に思うがままふるまう様子を示しており、肯定的な意味合いで用いられている。酒を飲んで節度を失い、思うままに行動する様子は、単なる愚か者にも見えるが、ある面では、野性的な若々しさを象徴してもいる。「悶を遣る、戯れに路十九曹長に呈す」の詩から推測できるように、酒興においての「清狂」は、愚かさよりもむしろ野性的な勇壮さ、大胆さを意味しており、「清狂」の客は宴会に花を添えるものでもあった。

三 「狂」に擬する

杜甫には遊びに興じる自己の様子を「狂」と形容するだけでなく、狂たる人物に積極的に自らを擬えている詩もある。

天宝九載(七五〇)、杜甫は官を求めて朝廷に「鵬の賦」を献じ、翌天宝十載にも「三大礼の賦」を献じている。しかし、二回の献賦が直接仕官に結びつくことはなく、杜甫

の期待は大きく裏切られた¹⁶⁾。この献賦後の天宝十一、二載（七五二、三）に作られたとされる「鄭広文に陪して何將軍の山林に遊ぶ」十首『杜詩詳註』卷二は、広文館博士である友人の鄭虔と共に何將軍の園林で遊んだことを詠んだ作品である。其一から其三の詩の中で、杜甫は美しい景色を見、おいしい食べ物食べて、無邪気に遊興に耽っている。しかし、其四の詩には、半ば自暴自棄的な表現が現れる。

詞賦工無益

詞賦 工なるも益無し

山林跡未除

山林 跡未だ除ならず

尽捨書籍売

尽く書籍を捨めて売り

來問爾東家

來たりて爾が東家を問う

詩賦の才能など全く意味のないものだから、いつそのこと蔵書を売って山林に隠棲したい、という思いは、献賦の失敗という背景に起因しているのだろう。そうであるとなれば、杜甫が遊びの世界に身を投じるのは、官を得られないことへの不安を解消し、自分の価値が認められないことへの憤りを紛らわせるためと言える。其八の詩では、さらに酒を飲み、羽目をはずした水遊びについて詠う。

憶過楊柳渚

憶う 楊柳の渚を過ぎしとき

走馬定昆池

馬を走らす 定昆池

醉把青荷葉 醉いては青荷葉を把り
狂遺白接羅 狂しては白接羅を遺す

杜甫は定昆池に馬を走らせ、酔って蓮の葉を採ってみた、白い帽子を忘れたりしたことを追憶している。「荷葉」の語について、諸注は魏の鄭公愨が大きな蓮の葉を取って酒を入れ、穴をあけて大量に飲んだ話を挙げており、この話が典故となっているが、『北史』卷八十九、芸術上の「李順興伝」にも、次のようなエピソードがある。

李順興、京兆杜陵人也。年十余、乍愚、乍智、時莫

識之。其言未來事、時有中者。盛冬單布衣、跣行水上、及入洗浴、略不患寒。家嘗為齋、方食、器用不周。順

興言、昆明池中有大荷葉、可取盛餅食。其所居去池十

數里、日不移影、順興負荷葉而歸、脚猶泥。拳坐驚異。

李順興は、京兆杜陵の人なり。年十余にして、乍ち

愚、乍ち智にして、時に之を識る莫し。其の未だ來ら

ざる事を言えば、時に中る者有り。盛冬に單布衣にし

て、氷上を跣行し、入りて洗浴するに及ぶも、略ぼ寒

を患えず。家嘗て齋を為し、食するに方り、器用周ね

からず。順興言う、昆明池中大荷葉有り、取りて餅

食を盛るべし、と。其の居る所は池を去ること十數里

なれども、日影を移さず、順興荷葉を負いて歸り、脚

は猶お泥あり。坐を挙げて驚き異とす。

李順興は予知能力を持っていたり、冬の水浴びが平気だつたりと、常人とは異なる才能を持っている。そして餅を蓮に盛るために、十数里の道のりを進み、人並みはずれた速さで戻ってくる。『杜詩詳註』に引く黄希注には、『新唐書』巻八十三の「安樂公主伝」が挙げられており、¹⁸⁾「昆明池を私沼と為さんと請うも得ず、乃ち自ら定昆池を鑿つ。」とあって、杜甫の遊んでいた「定昆池」が、李順興が蓮の葉を取りに行く「昆明池」を模して作られたものであることを指摘している。であるとすれば、杜甫が定昆池で遊ぶ自身を李順興に擬えていたとしてもおかしくはない。大量に酒を飲み、驚くべき速さで馬を走らせていることを表現しているのである。また、「白接離」とは、白い帽子のことであり、先に馬上の酔いの典故として挙げた、『晋書』の山簡の伝が基になっている。山簡は、国家崩壊の時世にあるというのに、全く意に介さず、池に遊びまわって酒を飲み、酩酊状態で「白接離」をさかさまにかぶっていることにすら気がつかない。朝野の人々が動乱におびえる中、一人世の中から隔絶して遊び酒におぼれている。しかし、山簡のこのような行動は、暗い世相を生き抜くための一つの賢い方法でもある。

杜甫にとつて、これら「狂」たる人物に自らを擬えることは、いったいどのような意味を持つのだろうか。「狂」とは、認められない才能を持つ杜甫自身、そして社会からはじき出された逸脱者としての杜甫自身の象徴である。その逸脱の「狂」とは、単なる愚かな「狂」ではなく、李順興や山簡のような価値ある「狂」である。「遊び」の中で、杜甫は李順興や山簡に扮し、自負ある逸脱者となつて自己の存在を呈示する。李順興は彼の本質として才能ある「狂」を生き、山簡は乱れた世の中を乗り切る一つの方法として「狂」を生きた。彼らの生き方には逸脱者としての誇りと自分の道を行く信念がある。杜甫は社会から逸脱していく自分を客観的に意識しながらも、李順興や山簡に自らを擬えることで、己の変わらない気魄の輝きを読者に呈示しようとし続けているのである。さらに、今まで見てきたように、杜甫の「狂」は、冷やかかな客観性にとどまりきらない、快感の喜びを伴っている。自分自身を日常から解放することの喜び、精神の高揚が「狂」という言葉で表現されているのである。

おわりに

本稿で検討してきた杜詩の「遊び」には、快樂や興奮、

気ままな気晴らしといった要素があり、杜甫の「敏捷」の一面を明らかにできたと考える。先にも挙げたカイヨワは、遊びに不可欠な要素として「気晴らし、熱狂、自由な即興、気ままな発散（パイディア）」を持つことと、さらに日常生活から完全に乖離した活動であることを挙げている。しかし、「鄭広文に陪して何將軍の山林に遊ぶ」其八の詩に見られた「狂」へのあやかりは、日常からの脱出のみならず、確固たる気概を持つ逸脱者として、自己の存在を世の中に呈示する手段でもあった。賢い狂者に擬することは、現実社会の中で傍流にありながらも、アイデンティティを確立しようとする杜甫の意志の表れでもある。「鄭広文に陪して何將軍の山林に遊ぶ」詩における「狂」への擬えは、現実への志向性を強くもっており、カイヨワの論のみで言い尽くすことはできない。愚かな性質を表す「狂」、遊びの中での放逸さを表す「狂」、価値ある才能や生き方を表す「狂」、この「狂」の意味の重層性が、杜甫の自己意識を複雑なものとし、杜詩の味わいを深めていることは確かだろう。また一方で、「狂」となることの快感、喜びが、杜甫の「遊び」の詩の中には確かに息づいているのである。

注

(1) 例えば、嚴羽『滄浪詩話』の「詩評」には、「子美、太白の飄逸を為すこと能わず、太白、子美の沈鬱を為すこと能わず。」とあり、杜詩の特質の第一に「沈鬱」であることを挙げている。また、『杜詩詳註』（中華書局）附編の「諸家論杜」に引く屠隆は、「少陵慷慨深沈、不除煩熱。（中略）所以擅場當時、稱雄百代者、則多得之悲壯瑰麗、沈鬱頓挫。少陵慷慨深沈して、煩熱を除かず。（中略）當時に擅場し、百代に雄たりと称せらるる所以は、則ち多く之を悲壯瑰麗、沈鬱頓挫に得たればなり。」と評しており、さらに、同じく「諸家論杜」に引く長卿の『杜詩会粹』には、「沈思涵泳にして、絢爛なる者有るを見、（中略）謹嚴なる者有るを見、沈鬱頓挫なる者有るを見る。」とある。

(2) 本文中で引用した杜詩は、全て仇兆鰲『杜詩詳註』（中華書局、一九七九年）に依り、制作年は、四川省文史研究館編『杜甫年譜』（四川人民出版社、一九五八年）に依った。「鵬の賦を進むる表」の制作年については異説があり、『杜詩詳註』は、天寶十三載（七五四）説を採っている。

(3) R・カイヨワ著 清水幾太郎・霧生和夫訳『遊びと人間』（岩波書店、一九七〇年）

(4) 明、王嗣奭撰『杜臆』（中華書局、一九六三年）

(5) 『晋書』の山簡の話は『世説新語』「任誕」第二十三にも採られている。

(6) 王琦注『李太白全集』（中国古典文学基本叢書 中華書局、一九七七年）

- (7) 杜甫が酔って馬に乗ることを描く場合、山簡のエピソードを用いることはほとんどない。例外として、三章に挙げた「陪鄭広文遊何將軍山林二十首」『杜詩詳註』卷二や、「王霓擲酒高亦同過共用寒字」『杜詩詳註』卷十がある。
- (8) 原文は、「朱翰曰、(中略) 霑湿有何好处。醉則龍鍾、何得體輕。」『杜詩詳註』卷十八
- (9) 杜詩における「狂」は、(A) 酒に酔っての自己の様子を「狂」と表したもの、(B) 李白や従兄など他人を「狂」と言ったもの、(C) 具体的な飲酒の表現がなくなただ自分を「狂」と称したもの、(D) 「風」や「柳絮」といった言葉に付して自然物の動きを形容したもの、のおおよそ四つのタイプに類別できる。
- (10) 横山伊勢雄「詩人における『狂』について」蘇軾の場合『漢文学会会報』三四号 一九七五年
- (11) 谷口真由実「狂夫」(後藤秋正・松本肇編)詩語のイメージ『東方書店』二〇〇〇年 第五章 日常からの逸脱
- (12) 原文の傍らの○は筆者が付したものである。以下同じ。
- (13) 原文は、「公今用於裘馬、則言注意裘馬如清狂耳。」
- (14) 原文は、「瑤按、詩人所稱、多以縱情詩酒之類為清狂、与《漢書》所解殊異。」(王琦注『李太白全集』卷之二十)
- (15) 加固理一郎氏は「李商隱の『無題』詩連作について」『中國文化』第六十一号 二〇〇三年)の中で、「清狂」が、男性的な語感を持つているとし、「悶を遣る、戯れに路十九曹長に呈す」詩を例に、「清狂」であることが、男性の友人間

の人間関係において好ましい性質であったと述べている。

- (16) 杜甫が三度の獻賦を行い、右衛率府曹參軍の官に就くまでの経緯は、西本巖「杜甫における『戯題詩』——「官定まりて後戯れに贈る」詩について——」『小尾博士古稀記念中国学論集』汲古書院 一九八三年)や、中尾健一郎「杜甫獻賦考」(九州中国学会『九州中国学会報』第四十二卷 二〇〇四年)に論じられている。

(17) このエピソードは『酉陽雜俎』に見える。

- (18) 宋、徐居仁編 宋、黄鶴注『集千家註批点補遺杜工部詩集』(杜詩叢刊25 大通書局 一九七四年) 卷二

(筑波大学大学院)